

## 【小説部門・奨励賞】

招き猫

私立青翔開智高等学校 第1学年 城上 多聞

俺はとても不幸な人間だと思う。事あるごとにトラブルに巻き込まれ、気がつけば厄介ごとの渦中にある事が多い。

不幸エピソードには事欠かないが、中でも最も酷いのは、中学一年生の時の事だ。他人同士の殴り合いの喧嘩に、そこにいた男性が俺一人だったからという理由で仲裁に入らされ、その二人は軽い打撲や擦り傷で済んでいたのに対し、何故か俺は右目を失明した。

風が吹けば桶屋が儲かる理論の中の、失明をした人、もしくは鼠に食われた桶の持ち主のポジションに往々にしているのが俺だ。喧嘩が起きれば片目を失う。そう言葉にすると机上の空論と言うには因果関係がはっきりし過ぎているが、実際に他人の喧嘩に巻き込まれて失明をした人が過去どれくらいいたのだろうか。

なんでそんな事を考えているかというと、俺が今まさに不幸な出来事の中にいるからだ。見渡せば青々とした木々が生い茂っていた。山の中特有の甘いような青臭いような、なんとも言えない香りが漂っている。時折聞こえる謎の鳥類の鳴き声が不安を誘い、歩くと顔にへばりつく蜘蛛の巣が俺を不快な気分させた。田舎といえば心安らぐ憩いの場みたいな表現をされる事が多々あるが、それは田舎は田舎でも人が住んでいるライトな田舎の話だ。

田舎というかただの自然と表現した方がいいかもしれないが、誰も立ち寄らないような山の奥なんかこそ本当の意味の田舎がある。普通の田舎と真の田舎を見分けるのは容易だ。もしもそういう場所に立ち入ってしまうと、普段とは空気感というか世界観が全く違い、嫌がおうにも自分が異常な場所にいるのだと気がつかされるからだ。

実際、此処に立っているだけで俺の精神はガンガンに削れている。人工物は自分の持ち物くらいしかなく、気を抜けば自分が野生に返ってしまうような気さえする。まるで数世紀前にタイムスリップしたかのような感覚だ。

普段は山を歩いていて、空気が変わった事に気がついたら、直ぐに引き返してもう二度とそこには近寄らないようにしていた。それが今日は油断した。悔やんでも悔やみ切れないうが、もしも叶うのなら十数分前の自分にアドバイスをしてやりたい。本心からそう思っているが、もしもあの時未来の自分に声をかけられていたとしても、素直に従うような事はしなかっただろう。何故なら当時の俺は本当に無我夢中で、時空を越える奇跡が起きていたとしても、脇目も振らずに目の前の事象に集中していただろうからだ。

それ程までに強い誘惑が、昼飯を食べている最中の俺に舞い降りた。丁度腕時計の針が十二時を指していた事を覚えている。

今俺は少し遠出した所にある山の麓で、お握りを食べている。スケッチが趣味の俺は、休日にはたまにこうして気ままに出かけ、気に入った風景があれば紙に写し、適当な所で持ってきたお握りを食う。片目の光を失ってからは絵を描くのが少し難しくなったが、慣ればそこまで苦ではなかった。ただ、片目だけを酷使している今の状況は負荷をかけすぎていくらしく次第に残っている方の視力も低下していくそうだ。隻眼になって数年経つが、今の所はそんな予兆はない。だからこそいずれ来るであろう視力の低下がただただ怖い。

今日はよく筆が進む分、眠たくなってきた。欠伸をして伸びをしていると、足元に柔らかい感覚がした。びっくりしてそちらを見やると、黒猫がこっちを見つめていた。首輪はついてないから野良だろう。その割には綺麗な毛並みをしている。

スラリとした体と尻尾が俺の足に絡まるようにくっついている。そこまでは可愛くて良いのだが、突然の事でビックリした俺は、思わず後ずさってしまった。後退した足が湿ったワカメみたいな植物を踏み、尻餅をつく。すると、手が鋭い石に当たって、掌に傷がついてしまった。割と痛い。

ため息をついて川で傷口を洗った。こんな事は日常茶飯事なので、一応鞆の中に絆創膏を入れてはいるが、絶対覆いきる事ができない程大きな傷口になっている。俺がそうこうしている間、黒猫は優雅に腰を下ろして此方をじっと見ていた。

少し恨みの籠った眼差しでそっちを見ると、黒猫は小さく鳴いた後、スクッと腰を上げて此方に歩いてきた。開いた傷口を猫に見せつけた。

「お前のせいでこんな事になっちゃったんだぞ。」

俺の言葉が届いたのかは分からないが、黒猫は何となく申し訳無さそうな目で俺を見ているような気がした。猫に怒っていても仕方がないし、俺が間抜けだったからこうなったという所もある。撫でさせてくれたら許してやろうと思って怪我した方の手を引っ込めてもう片方の手を出そうと思っていると、その前に猫の方から俺の手に顔を近づけてきた。傷口に触れられたくはないが、向こうから来られては仕方がない。なされるがままにしていたら、猫は頬擦りをした後に傷口をペロリと舐めた。

中々可愛いやつだ。痛みも忘れて猫に構っていると、やがてある事に気がついた。猫の顔は俺の血が少し付いて少々ショッキングな事になっている。元々真っ黒だった毛並みの色がさらに濃くなり、不気味な雰囲気醸し出していた。しかし、その血の付いている箇所があまりに限定的過ぎた。血は猫の頬だけについていて、割と広範囲撫で回したはずなのに、他には何処にもついていない。思わず自分の手を確認すると、少し前まではパパッパッ割れていた筈の掌が、時間を巻き戻したかのように傷跡ひとつ無くなっていた。それも昔ついた一生物の傷跡まで。黒猫の方を見ると、突然手の止まった俺を不思議そうに眺めていた。

一瞬考えが停止するが、その後高速で思考が回った。頭の中で自問自答する。何が起き

たのか？傷が治った。それも過去についた傷跡まで。いつの間に治ったのか？猫の状態を見るに猫が手を舐めた時のようだ。何故治ったのか？分からないが、猫が原因なのは間違いない。

どういう原理かは分からないが、この黒猫に傷を舐められると、瞬時に治癒してしまうようだ。俄には考えられないが、そうでないと説明がつかない。なんの理由もなく傷が一瞬で治るなんて事はある得ないのだ。まだこの猫にそういう能力が備わっているのだと言われた方が納得できる。

次に思い浮かんだのは俺の目を治させる事ができるのではないかという事だった。

そこまで思考が巡ると、もう一度黒猫の方を見た。猫はキョトンとしている。俺はグッと顔を近づけて、光を失った眼球を差し出した。

「さあ来い。」

来たのは物理的な衝撃だった。猫の柔らかい肉球が、俺の目に激突した。そこ以外だったらダメージはゼロだったろうが、よりもよって唯一効く箇所を攻撃されてしまった。差し出したのは俺だが、まさかこんな事をされるとは思って無かった。

悶絶から立ち直り、気がつくとも猫は山の中に入ろうとしている。視力が戻るんじゃないかと思っただけ、どうやら叶いそうに無いようだ。まあ、手の傷が治っただけで儲けものだろう。もしかしたら神の使いとか、はたまた人を化かす妖怪とか、そういうものの類いだったのかもしれない。人の願いを好きなだけ叶えてくれるような都合の良い超常現象がいるわけがないのだから、夢を見すぎるものではない。

そうやって諦めようかとも思ったが、無理だった。持ってきたものを放置して、俺は一心不乱に黒猫の尻尾を追いかけた。

その後、なんやかんやで気がついたら此処にいた。ちなみに黒猫は見失った。此処が何処なのか検討もつかないし、お握りも少ししか食べてないから腹も減ってるし、なんなら暇だ。山は降りれば何処かに着く筈だからまだ安心だが、黒猫を逃すのは嫌だった。視力を取り戻したいという願いと、早くこの不気味な地から逃げ出したいという思いが衝突して、俺を悩ませた。ウンウン唸って腕を組んでいると、近くで物音がした。

黒猫かと思ってそっちを見ると、熊がいた。真っ黒な毛並みをした熊で、此方をじっと見ている。凶悪な体格とは裏腹につぶらな瞳はとても綺麗だと、場違いな事を思った。

喚き散らしながら逃げ出したいという欲求を必死で抑えて、その場に静止した。冷や汗が止まらないし、過呼吸になりそうだった。熊にあつたら走って逃げても絶対に追い付かれるし、死んだフリも意味がないというのは有名な話だ。

熊から目を逸らさないようにしながら、ジリジリと後退する。その間熊は微動だにせずずっとこっちを見つめている。ただ、何処からか響くグルグルという音が、俺の恐怖心を掻き立てていた。さっきまでの漠然とした不安感が、具体的な形を持って現れていた。

そうして数メートル後退した所で、突然何処からか物音がした。木々を倒すような派手

な音が山の中に響いて、空気を震わせた。俺と熊はその瞬間同時に肩をビクつかせ、俺が何もできないでいると、熊は何処かへ走り去ってしまった。

「助かった。」

緊張の糸が一気に解けると、地べたにへたりこんでしまった。もう悩む事はない。こんな所に長居は無用。命と片目だったら、当たり前以前者を選ぶ。

息を整えて立ち上がるが、まだ足が震えている。もうちょっと休んだら直ぐに帰ろう。そう思っていると、背中に温かい感触がした。ギャッと悲鳴をあげて立ち上がって、後ろを確認する。熊の再来かと思いきや、そこにいたのはあの黒猫だった。

「なんだよもう。」

黒猫は俺の足に体を擦り付けると、トコトコと何処かへ歩いて行った。今なら追いつける。でも今直ぐにでも此処から離れたい。一度決心したのにも関わらず、いざ黒猫を前にすると消えたはずの欲がまたフツフツと湧いて出てきた。

目を治してもらったら直ぐ帰ろう。そう時間はかからない筈だ。そう言い訳すると、俺は黒猫の後を追った。

黒猫に連れてこられたのは、小さな神社だった。人工物なんて何処にもないと思っていた分、少し拍子抜けしてしまった。しかし、直ぐに違和感に気がつく。人の痕跡さえ見つかれば心が少しは安らぐかと思っていたが、実際は全くそんな事はなく、心の中は依然逃げ出したいような不気味な雰囲気支配されていた。それは、神社の風貌があまりに異様だったからかもしれない。鳥居は神明系と呼ばれる、殆ど加工されていない丸太を使用したシンプルな系統のものだった。ただ鳥居を形成する貫と呼ばれる箇所がこの鳥居には存在しておらず、違和感があった。そして何より、ただ一つ存在する参拝用の建物の、正面の扉が全開になっている事が最も大きな奇妙な点だった。中はボロボロの畳が敷かれてある事以外は何もなく、ただの空洞だった。

黒猫は賽銭箱の横にチョコンと腰掛けている。此処が住処なのだろうか。優雅に腰掛ける黒猫とこの不気味な神社は、絵にしたいほど似合っていた。

ただ今はあまり呑気な事は言ってもらえない。今直ぐにでも目を治してもらって、速攻で帰るのだ。

賽銭箱を挟んで黒猫と向き合い、猫の脇に手を突っ込んだ。恐る恐る顔と顔を近づける。

「次肉球当てたら投げ捨てるからな。」

こんな事を言って意味があるのか分からないが、一応言ってみる。ちなみに猫というのはある程度高い所から落ちても綺麗に着地する事ができるので、伝わっていても無駄な脅しだ。

数秒見つめあっていたが、猫が目を舐めるような素振りは見せなかった。

痺れを切らした俺は、最終手段に出る事にした。猫というのはたまに鳴く。鳴く時は勿論口を開く。その時に目を突っ込めば、多分上手くいく筈だ。一か八かな気もするが、まあなんとかなるだろう。

今か今かと猫と向き合いながら待っていたが、一向にその時は来そうにない。こんな不気味な所でずっと待っていたくないとは思っているが、猫を撫でていると少なくとも孤独感は薄らいできた。

猫の温かみを感じていると、眠たくなってきた。また熊が来るかもしれないという気の抜けない状態であるのにも関わらず、長らく山道を歩いていた疲れと、猫の柔らかい感触に挟まれて、俺はウトウトしてきた。時々意識が飛びそうになるのを堪えていたが、数回それを繰り返していたら、ついに気絶するかのように深い眠りについてしまった。

随分と懐かしい場所にいた。目の前には石で囲まれた小池があり、様々な種類の植物がそこら中に植えられていた。池には色鮮やかな鯉が数匹泳いでいて、波紋を作りながら優雅に泳いでいる。綺麗に整えられた和風庭園だった。

俺がいるのは縁側で、そこに座って庭の風景を眺めていると、すぐ横に氷の入ったジュースを出された。差し出してきた方を振り向くと、そこには笑顔の叔父が腰を屈めて座っていた。

まだ若々しい姿の叔父だった。前に見た時は髪の毛の半分以上が白くなっていたが、目の前にいる叔父の頭は真っ黒で、顔の皺も殆ど無かった。

黙って出されたジュースを飲むが、味は全くせず、これが夢の中なのだと確信させた。夢の割には随分はっきりくっきりしている。明晰夢というのは初めてだ。夢の中なら全能かとも思ったが、飛んだり物を浮かしたりは何故かできなかった。

叔父は黙ってニコニコしている。久しぶりに会った叔父に対し、夢の中だというのに俺は緊張していた。だけどよそよそしい態度をとるのも違う気がする。俺は十年近くも前のことを思い出して、なるべく自然になるよう話しかけた。

「久しぶり、叔父さん。」

「久しぶり。目どうしたんだ？」

叔父さんは自身の右目を指してそう言った。そういえば、俺の目がこうなってから叔父さんとは会ってなかった。夢の中なのに正確だ。

「喧嘩に巻き込まれて失明した。まあちょっとかつこいいからいいけど。」

叔父さんは小さくリアクションを取って、それ以上は追求しなかった。その後も当たり障りのない会話が続いたが、やがて話題に尽きると二人とも黙った。そんな静寂の中に居て、不思議と居心地が良かった。

小さな頃の俺は、叔父さんの事をとっても慕っていた。それは今も変わらないが、当時は実の両親以上に懐いていたと思う。当時から不幸な目にあわされる事が多々あった俺は、その度に叔父に愚痴っていた。それを叔父は黙って聞いてくれ、時にはその状況を打開する術を教えてくれた。叔父は色々な事を知っていて、その話を聞くのが俺は好きだった。

そんな叔父が亡くなったのが、俺が中学に入学する前の事だった。よく亡くなった人に対して眠るように死んでいるという表現をされる事があるが、叔父の遺体からは生気のないよ

うなものは一感じる事ができず、誰が見ても亡くなっているのは明らかだった。病気で痩せ細り骨張った叔父の顔は、前もって叔父なのだと言われないと気がつかない程生前と様変わりしていた。

ハッと気づいたような顔をして、沈黙を打ち破るように、叔父が口を開いた。

「お前、今あんまり良くない所にいるな。帰り方は分かるのか？」

「さあ。まあ真っ直ぐ進めば何処かに抜けると思ってるけど。」

そう言った後、俺は今日の出来事を叔父に説明した。その間叔父は黙って聞いていたが、俺が話し終わると、真剣な眼差しで口を開いた。

「いいか、良く聞け。お前は今殆ど詰んだ状態にいる。袋の鼠で、四面楚歌、八方塞がり、孤立無援だ。俺だって力を貸してあげたいが、今の俺が出来る事と言えば助言をするくらいだ。でも、もしもお前が俺の言った通りに行動し、間違いを犯さなかったら、もしかしたら帰る事ができるかもしれない。」

なんの話をしているのかさっぱりわからないが、叔父の剣幕を見ると頷かざるをえなかった。叔父はスクッと立ち上がり、俺を連れて庭の外へ出た。

外には懐かしい風景が広がっていた。一面に広がる田んぼと、その横に流れる用水路が、延々と続いている。叔父の家は山の傍に建っており、同じようにして民家が幾つか続いている。

「此处からお前の家までの道のりは覚えてるな？」

俺が頷いたのを確認すると、叔父も同じように頷き、正面を指さした。その後、叔父の家から俺の家までを、遠回りしたり逆走したりしながら向かう道筋を叔父は教え、俺がそれを復唱すると満足そうに頷いた。

「やっぱり記憶力が良いな。」

そう言って頭を撫でられた。年相応の扱いをして欲しいと思ったが、悪い気はしなかった。

「歩き出したら真っ直ぐ前だけを見ろよ。猫が見えても無視しろ。」

言い聞かせるようにそう言った後、叔父はフッと表情を緩めた。少し寂しそうな顔をしている。

「じゃあ、元気で。」

歩き出してからは、叔父に言われた通り振り返らずに進んだ。途中道を忘れそうにもなったが、少し考えると直ぐに思い出せた。叔父は俺の事を記憶力が良いと言うが、実際は全くそんな事がなく、人並みに過ぎない。ただ叔父の話した内容だけは忘れる事なく記憶していた。

途中、黒猫が何度か視界の端で横切った。その度に叔父の忠告を思い出して目で追いたくなる衝動を抑えた。ふと、昔叔父が言っていた事を思い出した。黒猫というのは不幸の象徴だとか魔女の手下だとか、散々ないわれをされているが、昔の日本人は寧ろ黒猫を幸

運を招く動物として扱っていたと言う。欧州の影響で今は認識が変わっているが、古来の日本人の考えは黒い招き猫なんかからも感じ取る事ができる。ぼんやりと昔を思い出しつつも、歩みだけは止めなかった。

歩いている途中からの記憶は定かではない。ただただ叔父の言葉を思い出しながら一心不乱に歩き続けた。

気がつくと、山に入る前の、スケッチをした場所に寝転がっていた。時計を確認したら十二時半を指している。明らかにこれまでの時間感覚と釣り合っていない。

夢だったのだろうか。一瞬そう思ったが、直に違いと分かった。何故なら俺の右目はハッキリと光を捉えていて、昼の日光が眩しいくらいに刺さっていたからだ。